

新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介 (49) 平成 14 年 6 月 15 日

幕末・明治初期の経済書 (その3)

杉亨二 訳 『交易通史』(K086/10)

杉亨二(1828~1917)は日本統計学の開祖と称せられます。彼は文政11(1828)年に長崎に生まれました。10歳のころ孤児になり、苦学し、大坂の緒方洪庵、江戸の杉田成卿らにつき蘭学を学びました。その後、勝海舟の門人となり、幕府に仕え、開成所教授職にも就きました。1850年代中頃、オランダの新聞「ロッテルダム コーランド」の中にバイエルンの教育統計を見つけ、「スタチスチック」(統計)の存在を知りました。さらにオランダ留学から慶応元年12月(1866年2月)に帰国した津田真道、西周到から統計の話の聞かされ、統計学への思いを深くしました。明治元(1868)年、徳川家に従って、静岡に移住します。静岡学問所や沼津兵学校で教鞭をとりました。明治2年には沼津、原で人口調査を実施し、『駿河国沼津原政表』(S213/34)を作成します(当時、統計のことを政表と言っていました)。官庁統計の創設と普及に努め、統計が行政に及ぼす効用を説きました。例えば、静岡県富士郡の諸入費の統計を戸長の伊達文三に見せ、費用削減などの改革の必要を知らせています。

明治時代初期の日本の外国貿易統計を見ると、明治2(1869)年以降、輸入超過が続いています。保護主義の立場をとる杉亨二は、広大な植民地と莫大な資本を持つイギリスとは異なり、日本の輸入超過は金貨の夥しい流出を招き健全な経済状態でないこと、政府の外国からの買い入れを節減すべきことを太政官に具申しています。こうした状況の中で明治5(1872)年に翻訳・出版されたのが『交易通史』です。

『交易通史』の序文には、国際競争に負けないためには「交易」「工作」「航海」の三業を盛んにすることが大切で、その点について、ヨーロッパ各国の事績を詳らかにしようとするのが翻訳の目的であると記されています。また、原本は1862年に出版された、オランダの経済学者キイヒッツ著、ハン・オッテルロオ増補改訂の『ゲシキーデニス・ハン・コオプハンデル・エン・ゼーハアルト』という「商賣ト航海ノ起源」を書いた本であると記されています。

『交易通史』は商業史をヨーロッパ中心にまとめたもので、巻一・二・三上下の4冊からなっています。巻一ではフェニキアやカルタゴの繁栄から西ローマ滅亡まで古代地中海貿易について記されています。巻二では西ローマ滅亡からバスコ・ダ・ガマによるインド航路の完成、巻三の上下では世界貿易の覇権がポルトガル、スペイン、オランダ、フランス、イギリスと移っていく様子が、各国の海外進出や国際関係を交え詳述されています。17世紀に急成長を遂げ、世界貿易の覇者となったオランダは、当時、九州ぐらいの国土を持つ、人口250万人ほどの国でした。その盛衰の要因は何だろうか、『交易通史』は興味深く読まれたことと想像されます。

日本については、巻三上に日蘭貿易の開始(1611年)や出島のことが1ページ余にごく簡単に書かれています。また、巻三下に開国やその後の様子など4ページほどの記述があり、金銀比価のちがいによる金の大量流出、対策として幕府は金貨の改鋳を行ったことなどが記されています。

【参考文献】

『杉亨二自叙伝』(K347/1848)

『駿河国沼津原政表』(S213/34)

『日本長期統計総覧』(351/128)